大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

中国幻想建築コレクション(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 趙, 翼, 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011237

中国幻想建築コレクション（2）

大　平　桂　一

慶典（皇太后の誕生祝賀会）

趙翼原著
大平桂一訳

今回は「中国幻想建築コレクション（2）」として清代趙翼（1727〜1814）の『簷曝雑記』巻一に収められた「慶典」という文章を訳出する。前回紹介した「志園」は意思の力だけで構想された架空の建築群であったが、本稿では、乾隆帝の生母崇慶慈宣康恵敦和裕寿皇太后の還暦祝に、ほんの数日だけこの世に存在してすぐに撤去解体されたパビリオン群を訪れる。前回の前書きの分類で言えば第二類（実在したもののあっという間に撤去されたもの）にあたる。

作者の趙翼は字雲崧、号は甌北、常州府陽湖県の人。宋の王室趙氏の裔孫であり、六世の孫は世界的に有名な言語学者趙元任。乾隆二十六年（1761）、一甲第三名（探花）の成績で進士となり（本来は状元であったのに、探花に下げられた経緯は『簷曝雑記』に詳しい）、翰林院編修を経て広州府知府等の官職を歴任し、乾隆三十七年、広州府知府時代に下した判決を理由に弾劾され降格処分を受けたのをきっかけに致仕し、郷里で著述に専念した。著書に『廿二史箚記』三十六巻、『陔余叢稿』四十三巻、『簷曝雑記』六巻、『甌北詩話』十二巻、『甌北文集』五十三巻などがある。

若くして塾師として生計をたてていた趙翼は乾隆十四年（1749）上京し、まず工部尚書翰林院掌院学士劉統勲（清代の高名な書家劉墉の父）の邸内に寄遇し、翌年挙人となり、軍機大臣の汪由敦の邸内に居を移した。そこで皇太后の還暦祝賀式典に遭遇したのであった。趙翼のこの文章は、想像を絶する費用をかけて行われたこの式典を記録した殆んど唯一のもので、華麗で不思議な魅力をたたえたパビリオン群を短いながらも巧妙な筆緻で伝えている。

皇太后の誕生日は十一月二十五日である。乾隆十六年は御生誕六十年にあたり、内外の官僚たちは次々と京師に参集し、大祝賀行事を挙行した。西華門から西直門外の高梁橋に至る十数里の道のり（注１）を、地方ごとに区割りし、燈綵（かざりちょうちん）を張りめぐらし、楼閣を仮設した。天街（みやこおおじ）（注２）はもともと広々していたが、道の両側はとうとう（展示物にかくれて）商店が見えなくなってしまった。錦繡（ししゅうしたにしき）づくりの山河、金銀づくりの宮殿、綵（あやにしき）づくりの花、錦づくりの家屋、カラフルな燈（ちょうちん）に、珠宝をあしらった玉座など、赤や緑といった様々な色彩が反射しあって形容のしようもない程であった。数十歩ごとに芝居の舞台がしつらえられ、南北のお国訛で演じられる芝居に、各地方の音楽が合わされ、子役（注３）の達者な演技や舞い踊りがつづき、後ろの芝居がまだ終わらぬうちに、次の芝居が出迎え、左を見ては驚き、右を見ては目が眩むといった有様、そこを行きかう人は仙人の住む蓬莱島に入り、瓊楼玉宇（てんじょうのきゅうでん）（注４）の中で、霓裳の曲（注５）を聴き、羽衣の舞いを見るような心地がした。パビリオンの出来についていえば、飾り付けは上手だが、あまり金のかかっていないものもあった。たとえば、あや絹で山の形を作り、錫箔で波の紋様をこしらえたもの、蟠桃一個で数間のスペースを占めるものさえあったが、これらは粗末で言及する価値もない。

広東省が作った翡翠亭に至っては、広さは二〜三丈、すべて孔雀の尾で屋根を葺いてあり、亭一つで目一万個（注６）を下らなかった。湖北省の黄鶴楼（注７）は二重の簷（のき）（注８）が三層あり、壁は高さ七、八尺のガラスを使っていた。浙江省が出品した湖鏡は広い木造建築で、中は巨大な丸い鏡を天井にはめ込んであり、四方には小さな鏡数万を、うろこのように張りつけてあった。人がその中に入ると、一つの身体が無数の体と化し、「左慈の処として在らざる無し」（注９）を彷彿させ、まさに天下の奇観であった。

その時、通りでは女性だけが輿に乗るのを許され、士人や庶民は騎馬で通るか、さもなければ徒歩で通行した。飾りたてた車や馬が終日街路に満ち溢れた。私は全部で二回見物に出かけた。このように盛大な式典は、千年百年に一回も出会えそうもないのに、私は自分の目で見ることができた、本当に幸運だ。都は長至月（とうじのつき）（注10）には風吹き雪舞う日が多くなるのだが、この年

十日から二十五日までは風雨はパッタリと止み、三月の空模様のように晴れて暖かかった。天の心も共鳴してこの慶事を助けたのだろうか。

二十四日、皇太后の鑾輿(こし)が郊外の庭園から紫禁城へと進み、帝自ら騎馬で先導し、行列（注11）の進むところまったく塵も立たなかった。文武百官から大臣の命婦(ふじん)（注12）・都の士女たちまで皆盛装し、沿道にびっしり跪(ひざまず)いて出迎えた。皇太后はあまりの華麗壮大さをわずらわしくお思いになり、宮殿に着くやいなや撤去を命じられた（注13)。というわけで辛巳の年に挙行された皇太后御生誕七十年の祝賀行事の展示物はやや減らされた。その後皇太后御生誕八十年、皇帝御生誕八十年においては、都の祝賀行事の盛大さは辛未の年に劣らなかったと聞くが、私はすでに都を去っていたので見ることができなかった。

注

（1）飾り付けられた街路の詳細は後掲図1参照。

（2）清鈕琇『觚賸』正編巻四燕觚に、「京城元夜、婦女は袿(そで)を連ねて出で、月を天街に踏み、必ず正陽門下に至り、釘を摸(なで)て乃ち回(かえ)る。旧俗伝えて百病を走(しりぞ)くと為す。」

（3）原文は「侲童」。『後漢書』礼儀志中に、「臘(ろうのまつり)に先だつ一日、大儺、これを逐疫と謂う。其の儀は、中黄門の子弟年十歳以上、十二以下、百二十（人）を選びて侲子と為す。皆赤幘・皁製をみにつけ、大鼓を執る」とあるのにより、十歳から十二歳の子役を意味すると考える。

（4）「瓊楼玉宇」の用例は、宋代蘇軾の有名な詞「水調歌頭」に見える。「我は風に乗りて帰り去らんと欲するも、また瓊楼玉宇の、高処にありて寒きに勝えざらんことを恐る。」

（5）霓裳羽衣の曲は、唐代の宮廷で奏された楽曲。開元年間河西節度使楊敬忠が献上し、玄宗が潤色したとされる。白居易の「長恨歌」に「漁陽の鼙鼓　地を動がして来たり、驚破す霓裳羽衣の曲」など、用例は甚だ多い。

（6）孔雀の尾羽にある目玉の模様を指す。後掲図2参照。

（7）黄鶴楼は湖北省武漢市の長江を臨む黄鵠磯にあったが、解放後、長江大橋建設のとき撤去された。三国呉の時代に建てられ、その後何度も建て直

された。黄鶴楼を詠じた詩は数多いが、中でも唐代の崔顥の「黄鶴楼に登る」有名である。後掲図3参照。

（8）原文は「重簷」。『礼記』明堂位に「復廟重簷」とあり、鄭玄は「重簷は重ねて壁を承くるの材なり」と注し、疎はさらに「外檐の下壁に復た板檐を安(お)いて、以て風雨の壁に灑ぐを避く」と説明する。雨が直接かかるのを防ぐ二重の檐を言う。

（9）後漢の方士で房中術師でもあった左慈は曹操の宴会に招かれ、その場で松江の鱸と蜀の生姜を取り出す魔術を見せたが、曹操の不興を買い、殺されそうになった。そこで「慈は乃ち卻(しりぞ)きて壁中に入り、霍然(たちま)ち在る所を知らず。或ひと市にこれを見、又たこれを捕うるも市人皆形を変じて慈と同じくなり、誰か是なるを知る莫し」（『後漢書』巻八十二下方術列伝）という事態になった。

（10）「長至」は夏至と冬至の二つの意味があり、ここはその後に「多風雪」とあるからもちろん冬至の意味になり、「長至月」は十一月を指す。

（11）「行列」の原文は「金根」で、黄金で装飾した皇帝の馬車を指した。後漢の蔡邕『独断』巻下に「上(こうてい)の乗る所を金根車と曰う」とある。この文章では皇太后は輿に乗り、帝は馬に騎っているので、「金根」は「行列」と訳した。

（12）封号をもらった高官の夫人を「命婦」と称する。

（13）『清史稿』巻十二高宗本紀三乾隆二十六年十一月の条、「丙辰、上は皇太后を奉じて慈寧宮に御し、王大臣を率いて慶賀の礼を行い、聖母七旬万寿連珠を進製す。皇太后の懿旨を奉じ、進献を停止す」はこの記述を反映していると思われる。しかし、やはり豪華な祝賀行事が行われたことには変わりがない。

（14）この時の祝賀行事の一端は、『朝鮮李朝実録中的中国史料』下編巻十一正宗十四年（乾隆五十五年）からうかがえる。「皇帝節省を令すると雖も、群下は奉行し、侈大を極むるに努め、内外の宮殿、大小の儀物は、新たに辦(な)さざる無し。燕京から円明園に至るまで、楼台は飾るに金珠翡翠を以てし、仮山にも亦た寺院人物を設け、其の機括(からくり)を動かさば、則ち門窓は開闔(かいへい)し、人物は活動す。営辦資金は無慮屡ば万万(いちおく)、しかも一毫も官帑を費やさず。外に

ては列省三品以上の大員は倶に進献有り、内にては各部院堂官悉く米俸を捐(きふ)し、又た両淮塩院納むる所の四百万金を以てこれを助け、方に南京営造自り期に及びて輸致すと云う。」乾隆十六年の時に比して規模は拡大し、展示物も益々巧妙になってきたようだ。

図1

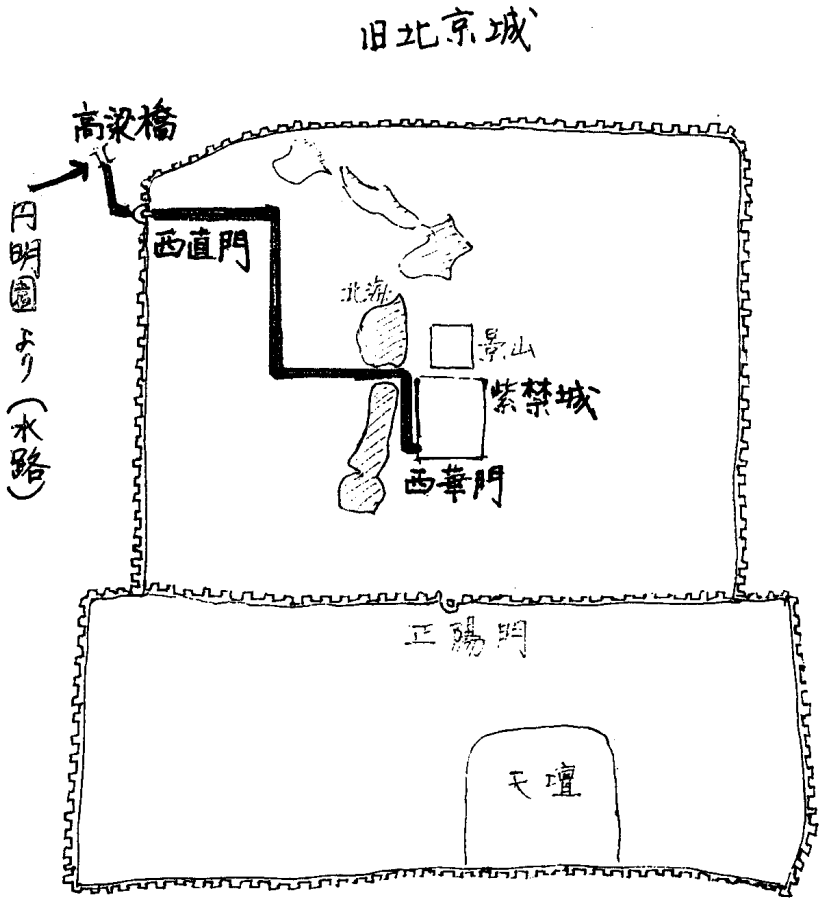
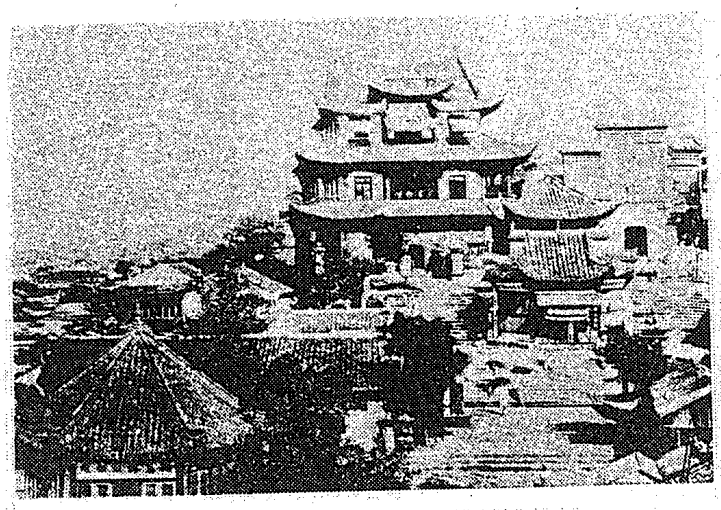


図2

緑孔雀

図3



跋　お気づきの方もおられると思うが、この「慶典」という文章は、『鏡の国の孫悟空西遊補』（平凡社東洋文庫刊）第四回の無数の鏡を備えたガラスの建築物「万鏡楼」の注釈で一度引用している。この「湖鏡」というパビリオンは、浙江省の献上物とあるので、あるいは董説の故郷呉興あたりでも、何かの祭典の折には類似の展示物が見られたのかもしれない。ただ万鏡楼の鏡は、それに対する人の像はまったく映らず、一枚の鏡に一つの世界が封じ込まれている、という性質を持つので、湖鏡とは発想をいささか異にしている。四方に鏡を張り、幾千万の自画像を楽しむというアイディアがいつ始まるのか知らないが、四方に鏡の屏風をめぐらし、自分の痴態を映して喜ぶ、このような趣向を取り入れたものに、宋代の作とされる「迷楼記」がある。次回の「中国幻想建築コレクション（3）」ではこの「迷楼記」をとりあげる予定であるが、内容があまりに猥褻なため、『国際文化』にはふさわしくないと判断し、発表の場は他に求めることとしたい。